

社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働による人類進化理論の新開拓

第 15 回定例研究会報告

1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です

Copyrighted materials of the authors

2. 研究会基本情報

日時： 2022 年 7 月 24 日（日） 14:00～17:00

場所： ハイブリッド開催（Zoom、AA 研 304 室）

報告者：

増田貴彦（アルバータ大学）

文化と認知研究の発展－文化心理学の「グローバル化」にむけて

3. 内容（要旨および質疑応答・議論）

文化と認知研究の発展－文化心理学の「グローバル化」にむけて

（増田貴彦）

要旨：

ヒトの行動の文化的多様性については、実験心理学の祖とされるウィルヘルム・ヴントの民族心理学の一連の論考以来、ロシア文化歴史学派、心理人類学、そして草創期の社会心理学など過去様々な領域で研究が行われてきた。こうした素地を基に、近年、文化心理学という、心理学・人類学・言語学・神経科学を統合させた新しい学際研究領域が生まれた。ジェローム・ブルーナーやリチャード・シュウェーダーなどの文化心理学草創期の理論家は、ヒトの心の仕組みは文化との相互構築過程を通して形成されるということを強く主張していたが（Bruner, 1990; Shweder, 1990）、その言説は、近年ジョセフ・ヘンリックらが行っている心理学批判とあいまって、様々な文化圏で集められたデータを比較検討することの重要性が唱えられることに至っている（Henrich, 2020; Henrich et al., 2010）。本研究会では、文化心理学研究の一例として、発表者は「文化と注視」というテーマで行った研究を紹介し、その後質疑応答を含めたディスカッションを行った。

文化心理学研究の一例として取り上げた「文化と注視」研究では、リチャード・ニズベットが提唱する、洋の東西の思考様式および基本的心理プロセスの文化差を検証している (Masuda & Nisbett, 2001, Nisbett, 2003; Nisbett & Masuda, 2003)。検証のために用いられた課題は、魚のアニメーション画像を見て、内容について言及する課題、あるいは五人の人物が描かれた画像を見て、真ん中の人物の表情からその人の感情を推測するという課題であり、北米人の学生と日本人の学生を対象としてデータを集めた。その結果、どちらの課題においても、北米人は、画像内の中心的な物体を注視する傾向があるのに対し、日本人学生は北米人学生にくらべ、中心的な物体のみならずコンテキスト・背景情報に注意を向けがちである傾向がみられることが明らかになった。発表者は、先に述べたニズベットの仮説に言及し、日本をはじめ東アジア圏で歴史的に継承された思考様式が、「木を見て森をみず」の戒めにあるように、物事を包括的に見ることの重要性を強調してきたのに対し、欧米文化圏で歴史的に継承された思考様式は、さまざまなコンテキストのノイズを捨象し、物体そのものから本質を見出そうとすることの重要性を強調していることを述べた。そしてそうした思考様式の違いは、現代に生きるそれぞれの文化圏の参加者にも共有されているという可能性を論じた (Masuda, Ellsworth, et al, 2008; Masuda, Wang, et al., 2012; Masuda, Nand, et al., 2022; Masuda, Shi, et al., 2022)。

発表者は、次に、物事を包括的に見る傾向は、東アジア文化圏の近隣諸国にも同様にみられるかを検証するために行ったモンゴルの大学生および青少年のデータを報告した (Masuda, Batdorj, et al., 2020; Masuda, Dashzeveg, et al, 2022)。この研究では、先に述べた人物の表情を判断する課題、および他の研究で用いられたことのある風景画を描写する課題が用いられた。表情判断課題は、大学生を対象としてデータが集められたが、モンゴル人が背景情報に注意を向ける傾向は、カナダ人のデータよりも日本人のデータに類似していることが報告された。また風景画描写課題は、小学校 1 年生から大学生まで、広範囲のデータが集められたが、背景情報を取り込む傾向は、同様にカナダ人のデータよりも日本人のデータと類似していることが報告された。発表者は、社会構造や生業形態の異なるモンゴルのデータが一貫して日本のデータと類似している点について、さらなる継続研究を予定していることを紹介した。

最後に発表者は、それぞれの文化圏に生れた子どもたちが、如何にして文化特有の注視傾向を身につけるかを検証するための研究を紹介した (Masuda, Lee, et al., 2022)。この研究では、先に述べた表情判断課題を用い、カナダ人と日本人の 7-9 歳までの子どもとその親を対象としてデータを集めた。セッションでは、まず親子それぞれが第一回目の表情判断課題に従事してもらい (セッション A)、次に親が第二回目の課題に従事している場面に子どもが質問者として参加するセッションを行い (セッション B)、最後に子供が第三回目の表情判断課題を行う (セッション A prime) という構成をとった。この構成により、カナダ人の親の回答の傾向は一貫しているか (セッション A と B の比較)、及び、親の介入 (セッ

セッション B) で子が短期間でも回答の傾向をより親の回答に似せるようになるか (セッション A と A prime の比較) を問うことが可能になった。その結果、日本人の親はカナダ人の親と比べ一貫して背景情報を重視する傾向があり、そうした傾向を持った親が介入することによって、セッション A では背景情報にあまり注意を払わなかった日本人の子どもも、セッション A prime では親の回答によせた回答をしがちであることが明らかになった。発表者は、こうした複層的な研究デザインの構成を用いることが、アレックス・メゾーディらが論じる文化進化のプロセスを明らかにするうえで有効であることを論じた。

引き続き行われたディスカッションでは、フィールド研究と実験室研究の目的の違いや、それぞれの強みについて、また親から子以外で知識の伝達が行われるルート (例えば友人や教師など) の研究の可能性について、そして知識の伝達が遂行されやすくなる子どもの年齢と、その理由についての議論がなされた。

参考文献

- Bruner, J. S. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Henrich, J. (2020). *The WEIRD People in the World: How the West became Psychologically peculiar Particularly Prosperous*. Farrar, Straus and Giroux.
- Henrich, J., Heine, S. & Norenzayan, A. (2010). Most people are not WEIRD. *Nature*, 466(29), <https://doi.org/10.1038/466029a>.
- Masuda, T., Batdorj, B., & Senzaki, S. (2020). Culture and attention: Future directions to expand research beyond the geographical regions of WEIRD cultures. *Frontiers in Cultural Psychology*. doi.org/10.3389/fpsyg.2020.01394.
- Masuda, T., Dashzeveg, D., Khurelbaatar, S., Bayart-Od, T., Ishii, K., & Kitayama, S. (2022). Nomadic Pastoral Mind in Mongolia: Comparing patterns of attention across Mongolians, Japanese, and European Canadians. Unpublished Manuscript, University of Alberta.
- Masuda, T., Ellsworth, P., Mesquita, B., Leu, J., Tanida, S., & Veerdonk, E. (2008). Placing the face in context: Cultural differences in the perception of facial emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 94, 365-381.
- Masuda, T., Lee, H., Senzaki, S., Hashiya, K., Itakura, S., & Hayashi, N. (2022). *Culture and Emotion Perception: Investigating cultural transmission processes across European Canadians, Japanese Canadians, and Japanese families*. Unpublished Manuscript, University of Alberta.
- Masuda, T., Nand, K., Lee, H., Shimizu, Y., Takada, A., Uchida, Y., Senzaki, S., & Kodama, M. (2022). *The Emergence of Culturally Dominant Modes of Attention in 7- to 10-year-old Canadian and Japanese Children: The Role of Reasoning Style*. Manuscript submitted for publication, University of Alberta.
- Masuda, T., & Nisbett, R. E. (2001). Attending holistically vs. analytically: Comparing the context sensitivity of Japanese and Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81,

922-934.

- Masuda, T., Shi, S.-W., Varma, P., Fisher, D., & Shirazi, S. (2022). Do surrounding people's emotions affect judgement of the central person's emotion? Comparing within cultural variation in holistic and analytic patterns of emotion perception in the multicultural Canadian society. *Frontiers in Human Neuroscience*. <https://doi.org/10.3389/fnhum.2022.886971>.
- Masuda, T., Wang, H., Ishii, K., & Ito, K. (2012). Do surrounding figures' emotions affect the judgment of target figure's emotion?: Comparing the patterns of eye-movement between European-Canadians, Asian-Canadians, Asian international students, and Japanese. *Frontiers in Integrative Neuroscience*, 6:72. doi: 10.3389/fnint.2012.00072.
- Mesoudi, A. (2011). *Cultural evolution: how Darwinian theory can explain human culture and synthesize the social sciences*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Nisbett, R. E. (2003). *The geography of thought: How Asians and Westerners think differently... and why*. New York, NY: Free Press.
- Nisbett, R. E., & Masuda, T. (2003). Culture and point of view. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 100, 11163.
- Shweder, R. A. (1990). Cultural psychology: What is it? In R. Shweder (Ed.), *Thinking through culture* (pp. 73–110). Cambridge, MA: Harvard University Press.

質疑応答と主な議論：

<Culture & Context Sensitivity の実験：魚のアニメーション画像の使用>

- 社会的文脈でも人間関係でもなく自然物や動物を使用したのは、社会性の文化差をそぎ落とす意味合いがあったのか。
 - そのような意図はなく、魚の動きはアニメーションにできたというのが正直なところである。後付けではあるが、複雑な社会的文脈をそぎ落とした条件でも結果が出ることを示した点は良かった。魚の画像を見て、魚の感情を話す日本人の子供がいたが、北米人ではほぼいなかった。身近な生き物と人との関わりの中で、どれだけ擬人化して自分たちのコミュニケーションの世界を反映させるか、というのは面白いデータが取れそうな気配を感じた。
- 周りを見る/見ないという傾向は小学生になるときに身につくのか。
 - 課題により異なる。実施した課題で見えてきたのは9歳から10歳前後である。より課題を簡単にすると、日本人は7歳で背景情報に敏感であるという結果もある。絵の課題で水平線を背景のどこに描くかの文化差は小学校3年生ででてくる。

<Culture & Context Sensitivity の実験：言語依存性>

- Culture & Context Sensitivity の実験において、日本人には日本語、カナダ人には英語で実験をしたのか。

- 課題は基本的にその国の子供が使用している言語を用いてデータを取得している。
- 英語と日本語でどのように質問したか。
 - それぞれ以下のように聞いた。
- 英語： What did you see in the animation? Please describe it, taking as much as 2 min.
- 日本語：どんな画像でしたか、お話してください、2 分間でお願いします。
- 日本語で「何が映っていましたか？」と質問をすると実験的なニュアンスが強い。「どんな絵だった？」と質問をする方が自然な会話である。言語依存性が高く、聞き方を変えたら異なる答えが返ってくるのではないか。
 - 言語の影響は興味深い、それほど言語の影響はないというのがこれまでの実感である。
 - 質問の等価性は永遠の課題である。少なくとも、仮説に引っ張れないようニュートラルな質問を選んでいく。多様な質問・方法で実験を行っても結果が安定していることを示すことで担保するしかない問題であると思う。方法に疑いを持った人が質問を調整し追試し、同じ結果が出ることを期待する。心理学の場合は結果が受け入れられるのに 10 年程要し、被引用数が重要となる。再現する人が多いほど結果を信頼できる。
- 「文化」は 1 人では伝達されず存続できないと人類学者は捉えている。文化伝達においては、言語や身体様式がコミュニケーションに使われる。そのため、質問の仕方やコミュニケーションツールにも着目すると人類学との関係が深まるのではないか。
 - 実際のデータ収集では、質問が被験者に伝わらない場合は補足する必要があり、厳密な意味で統制されたデータは取りきれない。しかし、理解していない被験者に同じ質問を繰り返し、データをとることが科学的であるのか。どちらを重視するかは議論の余地があるが、実験者と被験者の共同作業に近い部分がある。しかし、共同作業部分を強調すると論文にならないというジレンマがある。
 - 人類学者は文化における自身の存在を議論しているのに対し、心理学者は観察者としての視点を当然のように受けている人が多いように思う。

<動物の絵を用いた実験計画>

- 生物学者は何でも適応で考えるため「モンゴルの環境に適応的な認知とはこういう形である」という説明をしてしまう。そういうものを意識し実験に馬の画像を使用したのか。
 - 魚ではなく馬の画像をモンゴルの人々に見せる理由は、モンゴルの人々が魚を見慣れておらず、食材としてもあまり利用されていないため、知っているものを見せたいと考えたためである。適応という概念に関しては、アレックス・メゾーディ的な文化伝達の議論に乗せながら、遺伝にとらわれすぎることなく、ロジックとしてのダーウィニズムを重視し、経験に重きを置く立場で将来的な研究をして

いきたい。

- 東アフリカの牧畜社会で家畜のラクダの写真を見せると、牧畜民は写真全体を広く見て語る。しかし、東アフリカに生息しないフタコブラクダの写真を見せると、ラクダにしか焦点が当たっていない様子だった。コンテキストにより際立って見るものが変わってしまうのではないか。
 - ファミリアリティーとアンファミリアリティーの問題であると考えられる。刺激画像を作成する際は入念に事前調査を行い、自然さを重視し新規性をできるだけ減らす。例えば、ありえない色の動物はいれない、環境にそぐわない動物はいれない、等である。
 - 一方で、文化心理学分野の研究は統制が全てなので、不自然さは覚悟の上であえて統制はする。例えば、複数の画像を用いる場合、その画像間のレイアウトや動物の数、動きなどを一定に統制することに重きを置いている。それは複数のオブザベーションを平均化して研究報告としてまとめることが慣例となっており、そうした統制によってデータのブレをなくす心がけがあるゆえに、画像不自然さが生じたとしても、それはある程度覚悟のうえで、受け入れているところがある。
- 日本の子供はテレビ等で「写真が横にスライドする＝動く」と捉える約束事に慣れているが、それがない状態では馬が水平に動くというのは生物学的に奇妙である。その点が結果に影響していないのか。馬の動きを見慣れているモンゴル人にはきつい刺激なのではないか。
 - 試行錯誤的な部分がどうしても生じてしまう。まずは試しにデータを取る必要がある。その結果を受け、再考しなければならない。
- 馬が動く必要はあるのか。静止画は使用できないのか。
 - 静止画を使用する方法もある。しかし、先行研究でわかっているのは、動きがないと被験者があまり語れないということである。語りが少ないと、背景と前景のどちらに興味があるのかデータからわからない。ただし、不自然な動きの馬よりは静止画の方が良いと言うのは確かである。
- 速い物があるとそっちにより目がいくこともあるのか。
 - それは普遍性の中の一つである。そこに文化差はないと思う。

<The Emotion Judgement Task：表情判断課題>

コントラスト・エフェクトについて

- ハッピー・ジャッジメントは「中央も周りの人も笑っている時の判断」－「中央の人が笑っていて周りの人は悲しい時の判断」。結果がプラスであれば、中央の人も周りの人も笑っている時の方がよりハッピーという判断となる。
- 中央の人が悲しくて周りが笑っている場合、中央の人はいじめられているのでは、より悲しいのでは、とも感じるがどうか。

→ そのような周囲が違う表情をしていると感情の度合いを強く感じる傾向をコントラスト・エフェクトと言う。周囲が同じ表情をしていると感情の度合いを強く感じる傾向をアシミレーション・エフェクトと言う。日本人はアシミレーション・エフェクトが強い。しかし、特定コンテキストの条件下ではコントラスト・エフェクトが生じる可能性もある(例:参加者が、学校場面を想定し、仲間外れなどの言説を、回答に取り入れた場合、等)。

9-10 歳期について

- Culture, Development, and Emotion Judgment の実験において、日本人ではみられないがヨーロッパ系カナダ人 (European Canadian) では 9~10 歳にハッピー・ジャッジメントのスコアのピークがあり、凸型となっているのはサンプル数の問題か。
 - サンプルは各年齢層で 60 人近くある。9~10 歳の変化の理由として予想されるのは、サンプルによる偶然の可能性か、この時期に変化が起きる通文化的な要因があるかもしれない。しかし、今回のデータでは語れないため、現段階では最節約的に考え急激な変化は予想していない。
- 児童青年精神医学では、9~10 歳期はこれまでは許されていたルール違反が完全に許容されなくなる年代であるとされているらしい。
 - 「9 歳の壁」という言葉がある。それまでは自身の自然な反応でコミュニケーションが可能であったが、規範を守ることに対して突然厳しくなる年代である。データが文化特有の傾向を示した場合、その文化における規範に対する厳しさは大きく関わっていると思う。多文化主義が認められているカナダでは、許容度の高さや自分の居場所の多様さといったものがデータにでてきている気がする。
- 性に関しては間違えると重大であるため規範が強く決まっているのではないか。人間の場合、性成熟に達する 9~10 歳の間で社会規範に対する反応が鋭くなるということがあれば面白い。
 - 人間社会におけるコミュニケーションを複雑にしている要因として、繁殖に関わる何かと言うのは大きく関係しているだろう。性的な部分が目覚める時期が 9 歳から 10 代にあり、その議論は可能だと思う。

<The Emotion Judgment Task: The A-B-A' Design>

- セッションでは、まず親子それぞれが課題に従事し (セッション A)、次に親が第二回目の課題に従事している場面に子どもが質問者として参加するセッションを行い (セッション B)、最後に子供が第三回目の表情判断課題を行う (セッション A prime)。
- 子供は実際に保護者が答えた言葉の知識があり、セッション A と B の後、セッション A prime で子どもが答えた際に背景に言及した回数が増えたという理解でよいのか。
 - その通りである。子供だけで課題を行うセッション A では、7 歳から 9 歳では絵

の背景をあまり見ずに「だって笑ってるから」という回答が多い。しかし、セッション B では保護者から「周りの子が少し悲しそうだから」という周辺への言及がある。その後、セッション Aprime で子供に『もう一回同じ課題を 1 人でやってね』と指示し、保護者の言葉をどれだけ真似をするかを、保護者とのコミュニケーションがある前 (A) と後 (Aprime) で比較した結果を示している。

- 背景を説明した回数の比較ということか。必ずしも保護者の真似しているかは問わないのか。
 - 背景について言及した回数を分析の対象としている。例えば、「周りが」「みんなが」「他の子が」という言葉が出てきた回数をカウントする。回答については、親とそっくりの真似をするというよりは、親が背景に言及している、周りの子にも目を向けているのを、取り入れ、自分なりの答え方をしているようであった。
- セッション B では親と子にどのような指示を出すのか。
 - 子供に実験者役を演じてもらう。実際には『今、先生が君に質問したけど、今度は君が先生の役をしてくれる？』と指示する。『お母さんに「どんな気持ちだと思う？」と聞くと数字を答えるから「なんで？」と聞いてくれる？』と言う。このように、仮の実験者である子供と被験者である保護者のやり取りをデータとして取る。
- 感覚としては真似なのか。セッション B (保護者とのやりとり) がきっかけで自ら背景を見るようになるのか。
 - そこまではデータとなっていない。可能ならば、子供たちを 1 ヶ月後に再度実験し、それが定着しているかどうかを調べたい。またはアイトラッカーを使用し、子供の視線が実際に背景をみるか調べる研究で検証可能である。今回の実験は、少なくとも親と一緒にいった前と後で差があり、伝達の基礎的部分は短期間でもあることを示すことを目的としていた。将来的に、大人になった際にその反応が定着し自然になる、ということを予想した研究も考えている。
 - 親と全く同じ言い方をしている子供はおらず、自分なりに解釈しようとしている気配があった。全くの真似であればデータを見れば分かるが、そうではなかった。
- 今回の実験の中で、親が「絵の背景は見なくてよい」と子供に言った事例はあるか。
 - 北米の母親がそういう発言をしてくれたらよかったが、そういったデータは無い。少し課題を変え、正解はないが真ん中に焦点を向けるべし、背景に焦点を向けるべし、という自由度の高い課題を設定すれば、子供では最初大きな文化差はないが、次第に分化していく、という結果が得られるかもしれない。
 - 日本人と西欧人を対象に「周りを見るな」と指示した課題であるととらえれば、実際に指示どおりに周りを見なかったのは西欧人であるため、逆に考えれば日本人は指示に従わず、言うことを聞かないとも解釈される。「周りを見る」と指示したらどうなるかというデータは課題を完結させるために必要である。
- 親以外の年長者でも同様の実験はしているのか。

- 第三者の統制が難しく、今はそのデータはない。年長者の役割が学校の担任の先生では、先生が生徒相手に何度も同じことをしていると、実験に慣れて演技が純化をするようになってしまうという危惧がある。また、見慣れてしまった課題に、演技で回答することは、「自然な反応をデータ化する」という目的に反することになる。研究デザイン上、こうした問題が生じてしまうので、親以外の年長者から子どもへの知識の伝達を扱う斜行伝達の実験は研究コストを考えると実施が困難である。一度だけ参加する仲の良い友達を水平伝達の例として研究デザインに組み込むというのは可能かもしれない。

<文化差>

- 実験の設定が単純で非現実的だからこそ説得力があるように感じた。「こんなのありえない」という設定で文化差がでる点に説得力があるのか。
 - 心理学者が行う抽象的な画像や画材を使った課題は、現実世界から見たら異常である。しかし、普通では見られない極限状態に追い込んだ際に初めて出る文化差があり、心理学実験には、そうした隠れた文化差を明らかにする効果があると感じている。しかし、最終的には実験の生態的妥当性を問われるべきであり、現実世界に落とし込まれた際にどのような形で差が生じるかというのは考える必要がある。
- 親の影響で文化差が生じる、という結果があったが、親の影響が及ぶ前の部分が人類普遍的で文化差の及ばないものとして考えるのか。
 - 文化心理学の初期の理論的枠組みが文化相対論的立場から生じているので、文化差ありきで研究を始めた文化心理学者も多い。しかし、自分のデータにも少なくともある年齢まで生きるために必要な子供の行動パターンには文化差はない部分があると感じる。そこに普遍的な部分があるのではないか。
- 自閉症に関して文化差の観点からの研究はあるか。
 - 規範の自由度の文化差が自閉症の人々の生活の質に関わると考えられる。例えば、多様な文化が共存する場所では行為の逸脱は目立たないが、9割以上の人々が同じ行為をする場所ではその逸脱が目立つ。文化が多様であると規範に対する厳密さやその表現・コミュニケーションの仕方に多少の許容度が生まれ、「こうすべし、これは逸脱している」という判断が緩くなると考えられている。この点は教育心理学の分野でよく調べられているのではないか。
- エモーション（情動）自体の文化差の検討はされているか。
 - エモーション表現、エモーション強度、エモーションという言葉に含まれるタームの多様性など、様々なエモーションに関わる文化差の研究がある。この分野の大家である Batja Mesquita が「Between Us: How Cultures Create Emotions」という本を最近出版したため、参考になるのではないか。（<https://www.amazon.com/Between-Us-Cultures-Create-Emotions/dp/1324002441>）

- 利他的行動はどこまで文化差がないものとして考えられるのか。
 - ヒト一種で語れるほど文化差は小さくないと思う。コア（文化普遍性）が重要と考えるか、コアの周りの実（文化差）の部分が重要とするかは意見が分かれる。コアが大きいアボガドみたいなものとする人もいれば、ブドウの種ぐらいと考える人もいる。
 - 文化心理学者の中でも文化普遍性はいくつかの次元で分けるべきとされている。例えば以下のようなものがある。杓子定規に自分の主義主張をぶつけるよりは、度合い分けをし、データ・課題ベースの議論に持ってきたほうが建設的なのではないかと考えている。
 - ① ある文化に見られるパターンが他の文化には全く無いとする、完全相対的で普遍性が無い状態。“Non-universal”と呼ばれる。
 - ② コアはあるが解釈の仕方や文化の中での捉えられ方が異なるため、あらわれる心理プロセスが異なる形になったり、時として真逆となる。Existential Universal と呼ばれる。
 - ③ ある課題において、やり方や心理プロセスは同じだが、課題の出来の度合いに文化差が生じる。Functional Universal と呼ばれる。
 - ④ 課題の出来の違いが年齢的に生じるが、どの文化でも同時期に生じる。Accessibility Universal と呼ばれる。

<文化差の形成メカニズム>

- The Emotion Judgement Task における日本人と欧米人の差は、教育の違いによって生じると理解できる。しかし、Culture & Context Sensitivity の実験で魚の背景に注意を向けるかどうかの違いが生じるメカニズムはどう考えられるのか。「周りの人の気持ちを理解しなさい」というのと、「周りの環境に普段から注意を向けなさい」というのは違う話ではないか。
 - 魚の実験では、こうすべしという規範がどれだけ一般化されて他の状況でも見られるかを示していると思う。「他の子の気持ちを考えなさい」という教育から、「魚の気持ちも考えてみよう」というように、感情を感じられるものに対する般化が起きると予想している。さらに抽象的な次元になると、八百万の神がいて世の中持ちつ持たれつだ、世の中は因果応報で結びついている、という一般化に至るのではないか。
- 誰もが社会の中で育っているためコンテクストを読む必要があるにもかかわらず、心理学的な実験をするとなぜ日本人とアメリカ人の間で差が出るのか。実験になると、アメリカ人は強烈な個人主義の中で個しか見ないのか、または指示されたものに瞬時に強烈にフォーカスする文化なのか。強烈な個人主義的フォーカス文化はどのように育つのだろうか。

- どのように個人主義が育つかという根拠は Fernald & Morikawa 1993 (<https://doi.org/10.1111/j.1467-8624.1993.tb02933.x>) が有名である。内容は、母親と乳児を実験室でおもちゃを使って遊ばせる。アメリカでは、母親は車のおもちゃを取って「Look at the car. Can you tell me the color?」「It has four wheels.」のように物の属性を示して注意を強いるような形で、母親が乳児に対し行為をすると言うデータが多かった。一方、日本では、乳児におもちゃを持たせて「はい、これどうぞ」、返されて「はい、ありがとう」というような『やりとり』が重視されていた。アメリカにおいて、「何かに注意を向けろ」と言うのは、母親だけでなく先生や友達との日々のやり取りの中で埋め込まれているのではないか。

<文化差と年齢>

- 2019 年の顔注視の研究で、生後 7 ヶ月で「目」に注目するか「口」に注目するかの文化差が出る。これをどう理解すれば良いのか。遺伝的な要因か。この文化差と 9~10 歳に生じる文化差がどのように繋がるのか興味がある。
 - 遺伝と文化のインタラクションや共進化的な考えは文化心理学の中で持つべきだと思うが、実際に掛かる費用が高く、遺伝的要素が無かったときのダメージが大きい。「文化は遺伝か」という質問に返答をするためには研究すべきだと思うが、コストが高い。
 - 2019 年の論文の根拠は、グラスゴー大学の Rachel Jack の研究であり、そしてその論文の根拠は、おそらく 2007 年の私の共著論文 (Yuki, Maddux, Masuda, 2007) である。日本人の絵文字は「目」をベースに変えるが北米人の絵文字は「口」をベースに変えているという研究である。実物の画像を使用し実験すると、日本人も北米人も 8 割は「目」をみる。「口」に対する注視は北米人の方が高いがそれは 2 割程度の差である。この 2 割を重要とするかどうかは、文化普遍論者と文化相対論者がせめぎ合いになる部分である。
 - 乳児に差が出るとことと 9 歳の子供に差が出るとことは、違う次元のものを測っていると思う。私は乳児で文化差がでる必要は無いと思っている。でたら驚きだが、それを説明する根拠が遺伝にもコミュニケーションにも至らないとしたら、結果の価値は何か問題になる。
- 乳児に文化差がでるというのは、入力刺激の変化量の問題として考えられないか。表情表出のデータを日本人から取得する際に刺激を作るのが大変なのは、文化普遍的とはいえ表情の出方、強度、動きが違うからである。そうであるとなると、乳児自身の入力が変わるということがあり得るとすれば、乳児の知覚レベルでの視覚的発達を考慮しなければならないが、その上で入力が違うということまで示したら納得できる。
 - 入力刺激の変化量というと、そもそも乳児が目にする人々の情報 (たとえば顔の表情) などにすでに文化差があり、その違いが反映しているというのならば理解でき

る。ただ、発達心理学者が持つ普遍性の根拠を若さに求める強い欲求を文化心理学者は持っていない。高度な認知を伴う難しい言説は歳をとってからでないとでてこないという文化心理学のスタンスから考えると、乳児レベルは、これまで語ってきた文化差を語るループには入ってこないように思う。

- 文化差には、生態学的な背景をもとに文化差を説明しようとする流れがある一方で、もう一つあり得るのはナッシュ均衡的な均衡点はいくつかあり、どこに落ち込んでもいいが、本来の意味での集団淘汰というのも含め、集団レベルで均衡点が安定している恣意的な文化差がある。上記 2 つがどちらもあり、それがどちらかというわけではなく絡み合っている、というのが文化を考える上で重要だと思う。

(以上)